

『虞美人草』 喜劇の中の悲劇

Junko Higasa 2013.9.30

『虞美人草』は漱石自身が「技巧に懲りすぎた」と評している作品である。この文章に真面目に向き合うと確かに「これでもか」というくらい羅列した美しい表現に息が詰まるほどである。この作品は金、銀、赤、紫、黒、白、浅葱色、黄色などの有色を塗り込めた中に、白い雨の細かい線を入れた漱石の画である。その文章の奥の背景を見ると、奇数章では「日本書紀」「續日本書紀」といった日本の歴史が網羅され、偶数章では「プルターク英雄伝」「ハムレット」「マクベス」といった西洋の物語が含まれている。

そしてこの小説は「悲劇」である。しかし『吾輩は猫である』同様、腹の底から悲痛な笑いがこみあげてくるほどのユーモラスな表現で、人心に生じる欲得への批判を包み込んだところは痛快である。故に本物の悲劇である。悲劇はあらゆる喜劇の笑いに乗じて突如やってくる。様々な喜劇は人の目に鮮やかな有色である。悲劇は無に近い白である。そして有色は現世の煩惱であり、散る桜を思わせる白は真実である。作品最後の場面で、藤尾が読んでいた本の頁の行に色鉛筆で細かい筋が入れているのは、白い雨の細かい筋と呼応して一対の表現になっている。

そして息をつかせぬほど美しい言葉の宝石が詰め込まれた表現の中には、漱石の苦しみ・楽しみが見え隠れする。漱石にとって膨大な知識の集積は、その両方を与える人生のパズルのピースであったろう。